

昭和52年度の新収作品（絵画）について 越 宏一

国立西洋美術館は、昭和52年度に1億4,100万円の購入費をもって、絵画4点、版画5点、素描1点、工芸1点を購入すると共に、本館の要請により文化庁が購入した作品の管理換えにより絵画1点を加え、さらに、絵画2点および版画2点の寄贈を受けた。これらの作品のデータについては、別項の新収作品目録に譲って、ここでは、油彩画作品についてのみ簡単に解説したい。

ジリス・ファン・コーニクスロー
《「パリスの審判」が表わされた山岳風景》
16世紀末～17世紀初頭

1544年アントワープに生まれたジリス・ファン・コーニクスロー(Ⅲ)はパウルス・ブリルやヨース・デ・モンベルらと同時代の風景画の先駆者で、ヤン・ブリューゲルやローラント・サヴェリー、ダヴィッド・フィンケボーンなど17世紀前半のフランドル画家に大きな影響を及ぼした。1585年故郷の町アントワープを去り、1587年から1595年まで宗教亡命者として、ドイツのフランケンタール(ライン左岸)のネーデルランド芸術家コロニーに住みつき、ここで制作した。1595年アムステルダムに移り、同地で1607年に歿している。ジリス・ファン・コーニクスローは、アントワープ、ブリュッセル、メヘルンに定住した、フランドルの画家一族の最も重要なメンバーであるが、彼の青年時代および芸術的発展については不明の点が多い。モンベルをはじめとする同時代のネーデルランドの風景画家が空想的な高山風景に固執していたのに対して、コーニクスローは晩年、すでにヤコブ・ファン・ロイスダールの芸術を先取り

New acquisitions (Painting) By Koichi KOSHI

するかのような《森の風景》を描いた(例えば、ファドゥーツのリヒテンシュタイン・コレクションの2点の作品)。

本作品(図1)は、エドゥアルト・プリーチュ Eduard Plietsch (Die Frankenthaler Maler: Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der niederländischen Landschaftsmalerei, Leipzig 1910の著者)によりジリス・ファン・コーニクスローの作品と認定されたもので、画家の初期の様式をよく示しているという(1961年3月1日付の鑑定書による。なお、前掲書には本作品は言及されていない)。プリーチュは、本作品をドレスデンにある大作《「ミダスの審判」が表わされている風景》(1588年)と共にコーニクスロー初期の代表作としている。ただし、ドレスデンの作品と同様、本作品においても、前景左手に配された人物像は別の画家の手になるものであり、ルートヴィヒ・ブルヒャルト Ludwig Burchard (Das flämische Landschaftsbild des 16. und 17. Jahrhunderts [Austellungskatalog], Berlin 1972, Nr. 34, S. 14)は、ヘンドリック・デ・クレルク Hendrick de Clerk (ブリュッセル 1570年頃～1629年頃)が描いたものと推定している。クレルクはコーニクスローのみならず、しばしばモンベルその他の風景画にも点景人物像を描き添えている。なお、本作品の点景人物群の作者については、例えば、皇帝ルドルフ時代のブラハで活躍した画家とか、この時期に同地で仕事をしたフランケンタールの画家という可能性も全く否定はできない。ただし、この場合は、本作品の作者は必ずしもコーニクスローである必要はなくなるが、この点に関しては、今後の研究課題としたい(因に、



1 Gillis van Coninxloo. Landscape with "The Judgement of Paris".
Tokyo, National Museum of Western Art

コーニンクスローに関する近年の主要文献としては、H. Wellensiek, Gillis van Coninxloo: Ein Beitrag zur Entwicklung der niederländischen Landschaftsmalerei um 1600, Diss. Bonn 1954 および H. G. Franz, Niederländische Landschaftsmalerei im Zeitalter des Manierismus, Graz 1969 が挙げられるが、これらには本作品に対する言及はない。

いずれにせよ、本作品は、16世紀のマニエリスムから17世紀の写実的な風景画芸術への過渡期に制作された、フランドル風景画の典型的かつすぐれたサンプルであることには変わりはない。我々の視線はまず、画面前景の高い樹木の下に配されたギリシア神話の一場面「パリスの審判」に注がれ、次いで、その右手に比較的小さく描かれた、犬を連れた猟師や橋などのモチーフを経て、中景の都市の建物、さらには、パティニールの伝統をつぐ空想的な切り立った岩山に導かれる。このような、写実と空想の入りまじった風景が画面上に構成されている点、つまり、画面の左半分が前景、そして右半分が中景・遠景で占められるという、いわば「わざとらしい」空間構成にマニエリスムの傾向がうかがわれる。

ヤン・ファン・ホイエン

《マース川河口（ドルトレヒト）》

1644年

ライデンに生まれたヤン・ファン・ホイエンは、17世紀オランダ風景画の大家で、薄曇り空の下に展開する祖国の光景をおだやかな詩情をまじえて描いた作品を数多く残した。雲の多い広い空と低い地平線をもつ彼の景風画は、微妙

な明暗の調子によって、湿潤な大気と光の変化を巧みにとらえている。

ホイエンは10歳の頃からライデンでイサーク・ファン・スワーネンブルフその他について学び、その後約1年間同市の風景画家エサイアス・ファン・デ・フェルデの工房で過した後、1631年ハーグに移り、1634年同市の市民となった。しかし同年、ハーレムのイサーク・ファン・ロイスダールの家に住み、ここでも活動した。（1649年にはホイエンの娘が風俗画家ヤン・ステーンと結婚している。）数多くの素描が示すように、ホイエンは各地をたびたび旅行して回ったらしい。

初期のホイエンはエサイアス・ファン・デ・フェルデの影響もあって比較的華やかな色彩を用いているが、1620年代の末頃から彼の画風はしばしば褐色調のほとんどモノクロームに近い色調を示し始める。微妙な色調の変化によるこうした画風は1630年代のオランダ絵画の一つの傾向でもあった。ホイエンはピーテル・デ・モレインやサロモン・ファン・ロイスダールと共に、1630年代のハーレムの色調画法の代表者である。

1644年の年記と署名がある本作品（図 2, 3）は、ホイエン円熟期の河川風景画の佳品である。画面右手にドルトレヒトの町がみえ、波立つ河口の水面とそこに浮かぶ帆船や小舟、また舟をこぎ、漁に従事する人々などが、どことなくメランコリックな詩情をまじえて描き出されている。画面の3分の2を占める大空に広がる雲の層と水面との間を満たす光の描写もみごとである。

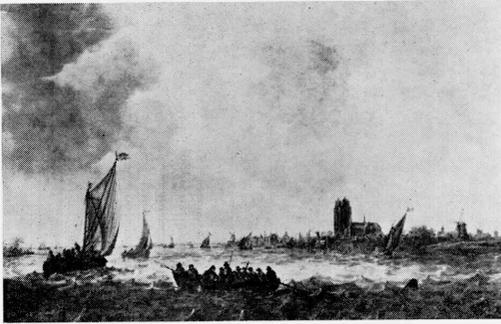
ホイエンは1640年代に、本作品（48.5×76cm）



2 Jan van Goyen. The Mouth of the Meuse (Dordrecht), 1644.
Tokyo, National Museum of Western Art



3 Detail of Fig. 2



4 Jan van Goyen. Dordrecht, 1644. Amsterdam, P. de Boer



5 Jan van Goyen. Dordrecht, 1644. Brussels, Musées Royaux de Belgique

と類似の構図およびモチーフをもつ《ドルトレヒトの眺め》を何点か描いているが、特にアムステルダムに所蔵の画家デ・ブール P. de Boer 氏所蔵のもの（1644年作, 104×134 cm, 図 4）およびブリュッセル王立美術館にあるもの（1644年作, 95×146 cm, 図 5）などが本図と比較できる。

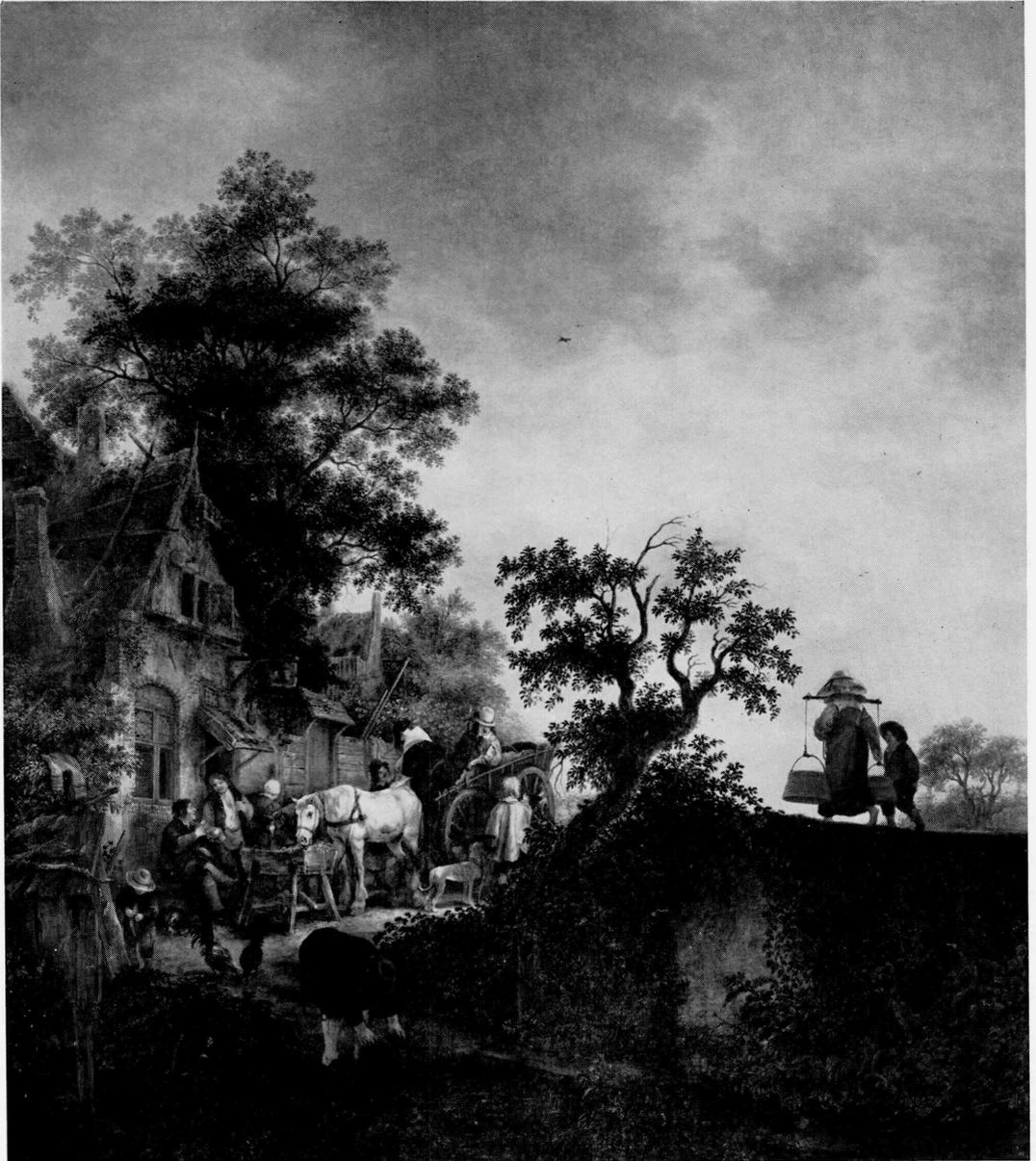
なお、本作品はベックによるホイエン総カタログ (Hans-Ulrich Beck, Jan Van Goyen, 1596～1656: Ein Oeuvreverzeichnis in zwei Bänden, Amsterdam 1973) には記載されていないが、将来刊行される補巻に収録される予定であるという。

イサーク・ファン・オスターデ

《宿屋の前の旅人たち》

1645年

イサーク・ファン・オスターデはハーレムに生まれ、同地で活躍した17世紀前半のオランダの画家で、28歳で歿したにもかかわらず約350点もの作品を残した。1610年生まれの子アドリアーンのもとで修業し、1643年にハーレムの画家組合に加入している。初期の作品は兄を思わせる室内画が多いが、人物の扱いは兄ほど戯画的でなく、色彩もより暖かみがある。しかしイサークがその真価を発揮するのは、戸外の農民生活を主題とした後期の作品で、荷馬車を駆り、あるいは氷上で遊ぶ農民たちの姿が灰褐色の暖かみのある色調と、しばしば対角線状に走る巧みな画面構成によって巧みに描かれている。19世紀には、75歳まで生き、約半世紀にわたって描き続けた兄アドリアーンの方が有名であったが、近年はイサークの方が評価が高まってきている。



6 Isaak van Ostade. Travellers Halting at an Inn, 1645.
Tokyo, National Museum of Western Art

イサーク・ファン・オスターデの活動期間は僅か10年ほどであったが、ホフステデ・デ・フロートの総カタログ(C. Hofstede de Groot, Beschreibendes und kritisches Verzeichnis ..., III, Eßlingen a. N./Paris 1910)では342点の作品がリストアップされている。しかし、署名年記があるのは、その内の約50点のみである。1645年の年記と署名が入った本作品(口絵および図6)もその一つで、この画家の持味を十分に生かした「優品」(J. Smith, A catalogue raisonné ..., London 1829)である。樹木に囲まれた、草葎屋根の宿屋の前で2頭立ての馬車に乗る旅人たちが休息をとっている情景である。4輪馬車の一組の男女のうち、婦人の方は宿屋の主人と談話をかわし、帽子を被った男の方は犬を連れて少年の方を向いている。宿屋の戸口では一人の男が腰かけて酒を飲みつつ、立っている男と談笑している。画面右手の丘の上の道には、少年を連れて一人の女が天秤棒で手桶二杯分の水を運んでゆく姿が描かれているが、この二人の人物の被り物の輪郭にはベンティメンティ(描き直し)が認められる(ただし、これは後代の画家の手によるものではない)。対角線上に配された樹木の描写も、曇り空とコントラストをなして美しい。

すでに触れたように、初期のイサークには屠殺した豚などのモチーフを配した農家の室内場面が多いが、1640年以降は屋外の農民生活を主題としたものが主流を占め、次第に風景画的要素も増大する。本作品は、そのような風俗画と風景画の両要素を巧みに組み合わせた作品といえよう。イサーク・ファン・オスターデは、同時期に同じハーレムで活躍したフィリップ・

ウーヴェルマン P. Wouwermann (1619—1668) 同様、宿屋あるいは居酒屋の前で旅人が休息する情景を得意としたが、本作品にも登場する白い馬のモチーフは、ウーヴェルマンの場合と同じく、彼のトレードマークでもあった。

ユベール・ロベール

《ローマのファンタジー》

1786年

〈モンテ・カヴァルロ〉の巨像が描き込まれている本作品(図7)は、前年度購入の同じ作者の手になる作品と対をなすもので、マルクス・アウレリウス帝騎馬像やトラヤヌス記念柱などを配した《ローマのファンタジー》(署名および1786年の年記あり)同様、ロシア貴族旧蔵のものである。ロベールの円熟期の作品にふさわしく、その色彩は明るく華やかで、タッチはよどみなく、彼の典型的な作品となっている。

なお、本年度の寄贈作品であるロベール筆の皿絵《牢獄風景》(パリのダニエル・ウィルデンスタイン Daniel Wildenstein 氏寄贈)は、画家が大革命の恐怖時代に王党派の容疑で投獄された際に牢獄内で描かれたものである。(ロベールの芸術については、前年度の当館『年報』を参照されたい。)



7 Robert Hubert. Fantasy of Rome, 1786.
Tokyo, National Museum of Western Art



8 Francisco Goya y Lucientes. Pilgrimage to the Fountain of San Isidro, ca. 1820.
Tokyo, National Museum of Western Art

フランシスコ・ゴヤ・イ・ルシエンテス

《サン・イシドロの泉への巡礼》

1820年頃

1819年2月ゴヤはマドリード郊外に「聾の家」Quinta del Sordo と呼ばれていた別荘を購入し、翌20年頃からその内壁にライフワークとも言うべき14点の絵を描いた。「黒い絵」Pinturas Negras と呼ばれるこれらの壁画は現在ブラド美術館に移されているが、本作品（図8；33×57cm）は、そのうち、《異端審問》Santo Oficio と題される壁画（図9；123×266cm）の油彩スケッチと考えられる。ゴヤの息子ハビエールの所蔵であった本作品は、小品ながら、晩年のゴヤ芸術を特徴づける奇怪で無気味な世界をよく示すと同時に、壁画の当初の状態を示す資料としても貴重である（漆喰の上に油彩で描かれた壁画は19世紀後半にカンヴァスに移された際、加筆された）。

壁画作品はブラド美術館に移されてからは、マドリード市民の春の行事《サン・イシドロの泉への巡礼》Peregrinación a la Fuente de San Isidro と名付けられ、以後この題名が一般化した。（なお、本作品については、次年度の『年報』に当館の雪山行二研究員が論文を発表する予定である。）



9 Francisco Goya y Lucientes. Pilgrimage to the Fountain of San Isidoro (Santo Oficio). Madrid, Museo del Prado

ジョルジュ・ルオー

《エバイ（びっくりした男）》

1948-52年頃

当館所蔵の《リュリュ（道化の頭部）》（1952年作）と共にルオー晩年の典型的な作品の一つである。頭部だけを描いた本作品（図10）も《リュリュ》同様、サーカスの道化師を主題にしたものと考えられるが、同じ道化でも初期の全身像あるいは半身像のものに見られる暗さや社会風刺性はなく、作者晩年の穏やかな、澄み切った心境を感じさせる作品である。その豊麗な色彩と浮彫のように絵具をもり上げた濃密なマチエールもこの頃のルオーの画風をよく伝えている。額縁を画面の一部のように見なして彩色し装飾的効果を高めている点もまた晩年のルオーの特色の一つである。

なお、本作品は、梅原龍三郎画伯の御好意により寄贈されたものである。



10 Georges Rouault. *L'Ebahi (The Surprised)*, ca. 1948–52.
Tokyo, National Museum of Western Art